

# あかつか

新潟市立赤塚小学校 学校だより  
令和5年度 第3号  
発行日 2023年6月30日  
TEL 025-239-2019 FAX 025-239-3803

## 子どもにはみえるもの・こと

校長 南伸裕



プールサイドから元気な子どもの声が聞こえてきます。昨年度までとは違い、制約が大幅に減ったからでしょう、本来あるべき水泳授業に戻りつつあるように思います(ですが、まだまだ完全終息とはいかないようで、用心も必要です)。

さて、今回の話ですが、相変わらず朝の話です。しかも5月最初の頃の話から始めます。その話の内容は、子どもの見ているものや見えているものは、大人の見ているものや見えているものと少し違うという話です。

毎度、同じことから書いてしまうことお許しください。

↓よく見るとアゲハが…



子どもとの朝の会話の中でよく出てくる話題は、

「さっき、虫がいた。」

「歩いてくる途中に、蛇が死んでいた。」

「蜂が飛んできて怖かった。」

等々、虫や動物が多いのですが、

その日は、「校長先生。アゲハがいる。」という突拍子もない言葉から始まりました。

その会話があった日は、まだ5月のはじめの肌寒い朝で、まさかアゲハ蝶が…というシチュエーションです。

私は、普通に、

「アゲハ蝶？ほんと？どこに？」

と子どもに聞き返すと、

「先生。いるでしょ目の前に〜。」

との返事。

その言葉に、必死に目を凝らすのですが、アゲハらしきものは見当たりません。

「なに言ってるの。いないじゃん。」

と返すと、子どもは、歩みを進め、しゃがみ込み、指をさして、

「ほらここにいるでしょ。」

と示します。そこでようやく、私は落ち葉の中に、横たわるアゲハ蝶を見つけることができました。

「ほんとだ。アゲハ蝶だね。だけど、死んじゃってるね。きっとまだ寒いからね。一応記念に写真を撮っておくよ。」

とその子に話をすると、子どもは、満足したのか、そのまま学校に向かいました。

ここで、私はハッとしました。そして次のことを思いました。それは子どもは大人と違って、まっさらの目で、周りを見ているのだということです。

大人は、子どもに比べて、はるかに長い時間を生きているので、その間に様々なことを見聞きし、経験として情報を蓄積しています。この朝の話为例にとると、アゲハ蝶は、夏の蝶で、幼虫はみかん科の葉っぱにつく…というようなことを既に知っているわけで、その知識をもとに、考えると、まだ薄寒い朝にアゲハはいるわけがないという先入観をもって、子どもの話を聞いているわけで、会話のスタートから子どもの話に疑いをもつてると



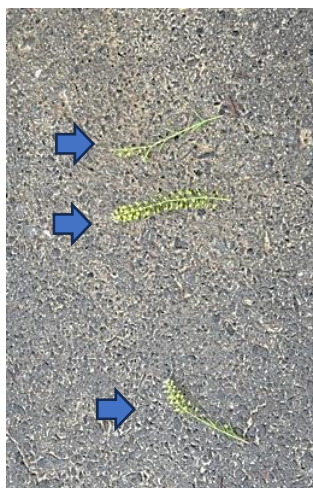
ということになります。したがって、アゲハ蝶を見ようとしてもしない身体をもった大人は、見えるはずがないのです。

しかし、無垢の眼差しをもつ子どもは、虫や鳥や動物等、好きなものがどんどん目に飛び込んでくるということが当たり前なのです。ですから、興味のあることやものにどんどん気がつく、そして、気付いたら、嬉しくなって、黙ってはいられない。そして誰かと、情報を共有しようとしています。その数が、あまりにも多くなると、大人は、子どもの「あのね～」という大切な学びの機会をむげに「うるさい。」などと、台無しにしてしまうことが少なくないのではないのでしょうか。

どうでしょうか。大人ももう少しゆとりをもって、子どものように、周りを見渡してみると、素敵な発見があると思いませんか？(ちょっと余裕はないかもしれませんが…)。

ちなみに、私は、アゲハ蝶を見てしまったので、その後、ググって、このアゲハ蝶は、ナミアゲハといい3～10月ぐらいまで2回から5回ぐらい発生すること。冬は蛹で越冬すること。などをさらに必要以上の知識を身に付けてしまいました。これでは、頭ばかり大きくなって、これまでより更に子どもと共に、発見や感動を共有することが難しくなるなあと思いました。

そんな気付きを得て1ヶ月。爽やかな風がそよぐ通学路を見ると、子どもは日々発見しながら登校して



いるのだなあと改めて感じています。

写真はいつもの通学路です。しかし拡大した写真を見てください。植物の穂先が3本きれいに揃えて並べています(写真を撮るときに風が吹いて1本ずれちゃいました)。おそらく、

登校しながら、この植物が気になって手に取り、それを間隔を意識しながら並べて、満足していたのでしょうか。また、田んぼの方を見ていると、通学路から外れてしゃがんでいる子たちがいます。私は「田んぼは農家さんの大事なものだから…」と声を掛けようとしたのですが、子どもたちの覗いている方を見ると、そこにはオタマジャクシが…。1か月前の気付きが全く生かされていないことに、自分自身、正直がっかりしました。

子どもが子ども時代に見ているもの、ことを、再度、大切にしていきたいと思いました。